

オピニオン

集落の医療万一の備え鍵



島根県松江市支所長 清水 敏博
 阿佐 秋太

広島、島根県境に近い

岩国市錦町字佐地区で1日にあった健康相談会を取材し、高齢化した集落の医療の在り方と、厳しい現実について考えさせられた。

字佐地区は約90世帯が生活する中山間地域の集落で、高齢者が4分の3

を占める。1日の健康相談管理を医師に頼らず、委員会は、山口大医学部非地域で迫る体制づくり。常勤講師の長谷亮佑医師「持病を抱えていても、(送)が昨年12月から始め、元気に日常生活を過ごせたい試みの3回目の会だった。

長谷医師の試みは、健康考えのもとに、住民同士

で日々の見守りと、体調が悪化した人の早期発見を自指す。地域である程度の健康管理ができるなら、近くに医師がいなくても最低限のセーフティネットは必要。今後の広

がりに期待すではないか。

る一方で、救急時の対応が気にかかった。

岩国地区消防組合によると、通報を受けて救急車が現地まで到着するまでの時間は、昨年の管内(岩国市と和木町)平均が8・2分。これに対し字佐地区は8分・5分もかかった。搬送は症状の緊急性や、かかりつけなどに応じ、町内にある市立錦中央病院に限らず、県境を越えた近隣の病院にも搬送されることになっているとはいえ、1秒を争う事態への対応には限界がある。

万が一の時、どう対応するべきか。納得するまで話し合ってきた。長谷医師の試みが、よりの地域で模範とした響がある。

記者縦横



山口大医学部の学生も参加した1日の健康相談会